

## 平成28年度三重大学国際交流事業実施報告書作成要領

事業実施後は、次の実施報告書を国際交流チームに提出してください。

- 1) 様式2-1 実施報告書（学内版）
  - 2) 様式2-2 事業の取組結果
  - 3) 様式2-3 事業に係る経費執行結果
  - 4) 様式 2-4-J 実施報告書（一般公開：日本語版）
  - 5) 様式 2-4-E 実施報告書（一般公開：英語版）
- .

## 平成 28 年度三重大学国際交流事業実施報告書 (学内版)

1. 申請部局

学部・研究科名等：人文学部

---

事業担当者の職・氏名：教授・大河内朋子

---

内線電話番号：9125

---

電子メール：tokochi@human.mie-u.ac.jp

---

2. 事業の名称 (20 字以内, 別に副題を付けても良い)

フィールドスタディー「ドイツにおける移民問題と過去の克服」

---

3. 事業内容の別 (該当するところにチェックを入れてください。)

教職員, 学生の海外派遣 (学会やシンポジウム等の出席は除く)

海外交流機関等からの教職員, 学生の受け入れ

国際教育プログラムの開発や推進

その他

#### 4. 事業の取組結果

##### (1) 事業概要 (簡潔に事業全体の概要がわかるように記述してください)

東海地域においては南米やアジアからの労働者が増加しており、将来的には外国籍住民との共生社会が到来すると予想される。他方、すでに 1970 年代以降トルコ系移民との統合問題を抱えてきたドイツでは、移民の背景を持つ住民自身および行政が共生に向けてさまざまな取り組みを行っている。また移民統合を阻害する最大要因であるナショナリズムやレイシズムを防止するために、ナチズムの過去を持つドイツでは、加害の場や被害の場に設置された公的な社会教育機関 (博物館等) による教育活動等をとおして、「想起の文化」の普及が図られている。日本の次世代を担う学生にそうしたドイツでの取り組みを学ばせることで、東海地域での共生社会実現に役立つ人材を育てたい。参加学生数は人文学部 2~4 年生 10 名を予定していた。

##### (2) 事業の背景・これまでの実績

人文学部では 1992 年以来毎年エアランゲン大学 (ドイツ) で語学研修を実施してきた。しかし、数年前から学生や教員の間で、文化学的なテーマの下に企画された専門性のある海外研修・フィールドスタディーの実施を求める声が挙がっていた。そこでドイツにおける移民・難民の受入とナチズムの過去の批判的継承をテーマに掲げた海外研修を企画し、文化学科「特殊講義」(2 単位) として学生に提供することにした。

2014 年度に 2 度ドイツに渡航して実施に向けた準備を行い、2015 年度に初回のフィールドスタディー (11 日間) を実施した。2015 年度の参加学生数は 11 名であり、事前研修と事後研修への出席、およびレポート提出を義務づけた。

##### (3) 事業実施結果

2016 年度の本事業は、2015 年度同様に、人文学部文化学科「特殊講義「ドイツにおける移民問題と過去の克服」」(2 単位) として実施した。履修学生 (参加学生) 数は 7 名 (全員、文化学科 2 年生) であった。

事前研修では、映画も利用しつつ、ナチスの人種理論や強制収容所での組織的虐殺にいたる経緯、「想起の文化」という記憶装置、また戦後のトルコ系移民増加の歴史的・社会的背景や移民の国籍取得率の低さなどの問題を学んだ。

現地研修 (添付資料「フィールドスタディー・プログラム」参照) では、まずベルリン (3 日間) で、強制収容所跡地等に設立された博物館の教育プログラムを利用して、収容の実態 (図 1) やナチズムへの抵抗の歴史 (図 2)、また「想起」をキーワードとして行われている反ナチ啓蒙活動の試みである「想起の記念碑」の設置 (図 3、4) について学んだ。



図1 「ラーヴェンスブリュック強制収容所」(カメラを使ったゼミナールに参加)



図2 「博物館・静かな英雄」にあるユダヤ人一家が匿われていた部屋 (タンスの後ろの部屋)



図3 「ナチ時代に迫害・殺害された国会議員のための国会議事堂前の記念碑」



図4 「空の図書館」(焚書が行われたベルリン大学前の広場)

続いて、ルール地方(3日間)に移動して、トルコ系モスクの訪問(図5)やモスクでの説明(「ドイツにおけるイスラム」)、ノルトライン・ヴェストファーレン州庁統合センターによる初等教育段階での言語教育政策に関するプレゼンテーション、小学校の訪問(移民の子どもたちに対する複言語教育の参観と説明)(図6)により、受け入れ側と移民の双方から、統合に向けてどのような取り組みがなされているかの実際を学んだ。またケルンの移民資料館で、移民の残した写真や家財道具などの現物を見学し、学芸員から収集・保存に関する説明を受けた。



図5 トルコ系モスクの見学（ルール地方） 図6 小学校の授業見学（ルール地方）

事後研修として、参加学生全員がレポート発表を行い、問題意識の深化を図った。

#### （４）事業の意義

現場を体験することが学生に与えるインパクトは大きいと言わざるを得ない。研修前の学生にとって、70年前のナチスの歴史は「教科書に書かれていた昔の出来事」でしかなかった。しかし加害や被害の現場に立ち、過去を批判的に継承しようと努める人々や過去の想起のためのさまざまな記念碑を目にすることで、ドイツの過去は学生の現在にぐっと近づく。そもそもが同時代性を孕んでいる移民・難民の流入とドイツ社会への統合問題の場合には、学生にさらに大きな刺激を与えた。たとえば同世代のシリア人難民の若者と会話を交わしたある学生は、自分の置かれている安定した環境との落差に愕然としながら、難民を取り巻く状況を理解しようと試みた。

現場で受けたこうした刺激が今後の勉学・研究の出発点になることは言うまでもない。ドイツでの研修期間中にも、参加学生相互で何に衝撃を受けたかを出し合って、何度か議論し、お互いの体験を共有しながら、論点整理を試みた。参加学生の中から、卒論研究としてドイツの移民問題に取り組む学生や、ボーフム大学（ルール地方）への留学を決心した学生が現れたのは、この研修の一つの成果である。

#### （５）事業の発展性

本事業は、来年度も人文学部文化学科「特殊講義「ドイツにおける移民問題と過去の克服」」（2単位）として提供することになっている。プログラム内容は、基本的には従来どおりであるが、来年度の改善点として、協定大学との交流を取り込む予定である。具体的に言えば、ボーフム大学生やハイデルベルク大学生との間での意見交換や、ハイデルベルク大学教員による講義（「大学とナチズム」などがテーマの候補になっている）を盛り込む可能性について、交渉中である。

#### （６）中期目標・中期計画における位置づけ

本事業は、中期計画番号D-1-a-①「Ⅰ 大学の教育研究等の質の向上に関する目標／4 その他の目標／（1）グローバル化に関する目標／1（大学と地域のグローバル化推進）」（1 世界で活躍できるグローバル人材を育成するために、在学中に海外留学や国際会議などで海外へ派遣するための海外渡航支援制度（略）を見直し）に対して、人文分野からの貢献となる事業であった。

(7) その他

なし

【添付資料】

2016年度フィールドスタディー・プログラム

9月22日(木)	10時30分	セントレア 発 (AY 080 便)
	20時40分	ベルリン・テーゲル空港 着
9月23日(金)	10時30分～15時	警告と想起の場「ラーヴェンスブリュック強制収容所」(ゼミナール)
9月24日(土)	10時～13時	警告と想起の場「静かな英雄」(ワークショップ)
	午後	ベルリン市内各所の「想起の場」見学
9月25日(日)	ベルリンからボーフムへ移動	
9月26日(月)	11時30分～14時	デュースブルクにあるトルコ系モスク(見学、講演「ドイツにおけるイスラム」、質疑応答)
9月27日(火)	9時30分～	ケルン市立市民大学(ドイツ語授業見学、受講生との質疑応答)
	13時45分～16時	移民資料館(見学と案内)
9月28日(水)	10時～12時	ボーフム市立小学校(複言語教育の見学・インタビュー)
	14時～16時	ノルトライン・ヴェストファーレン州統合センター(初等教育における移民統合政策の説明)
9月29日(木)	11時50分	デュッセルドルフ発 (AY 704 便)
	17時05分	ヘルシンキ 発 (AY 079 便)
9月30日(金)	08時50分	セントレア 着

## 平成 28 年度三重大学国際交流事業実施報告書（一般公開：日本語版）

東海地域においては南米やアジアからの労働者が増加しており、将来的には外国籍住民との共生社会が到来すると予想されています。他方、すでに 1970 年代以降トルコ系移民との統合問題を抱えてきたドイツでは、移民の背景を持つ住民自身および行政が、共生に向けてさまざまな取り組みを行っています。また、移民統合をはばむ最大要因であるナショナリズムや人種主義を防ぐために、ナチズムの過去を持つドイツでは、強制収容所の跡地やユダヤ人居住地区などに設置された博物館などによって、過去を忘れないための社会教育活動が活発に行われています。日本の次世代を担う学生にそうしたドイツでの取り組みを学ばせることで、東海地域での共生社会実現に役立つ人材を育てたいと思います。

ドイツでの研修は実質 6 日間でした。前半の 3 日間はベルリンで、女性用強制収容所の跡地を見学したり（図 1）、ユダヤ人を匿った人々の活動について学びました。また加害者としての過去を忘れないために、市内の各所に芸術的な「想起の記念碑」が設置されているのを見学しました（図 2）。



図 1 強制収容所のトロッコ

図 2 焚書が行われた広場にある「空の図書館」

後半の 3 日間は、移民の多いルール地方で、トルコ系モスクを訪問したり（図 3）、州庁の職員から初等教育段階での言語教育政策に関して話を聞いたり、小学校で移民の子どもたちに対してどのような教育が行われているのかを参観しました（図 4）。



図 3 モスク訪問

図 4 小学校での授業見学

現場を体験することで、参加学生は大きな刺激を受けました。70 年前のナチスの歴史は、もはや「教科書に書かれていた昔の出来事」ではなくなり、シリア難民は自分たちと同世代の若者の問題として受け止められるようになりました。参加学生たちには、今後、文献などをおして問題意識をさらに深めてもらいたいと思います。

平成 28 年度三重大学国際交流事業実施報告書（一般公開：英語版）

一般公開しない